

「大人力」

聞き慣れない言葉ですが、子どもたちの幸せを願い、子どもたちをサポートしていく大人の対応力と考えていいでしょう。子どもたちの人権を守る「子どもたちへの応援団」として、私達大人が日頃から考えておきたいことをシリーズとしてまとめてみたいと思います。

参考資料として、大分県防犯協会が発行している「試される『大人力』：受けとめていますか？思春期SOS」を利用しました。

問題行動に走る前の少年・少女たちは「思春期SOS」とも言えるサインを発しています。そのサインをしつかり受けとめ、子どもたちをサポートしたいものです。「きっと大丈夫：」との熱い思いを心に秘め、理性と勇気をもって「大人力」を発揮していきましょう。

愛されている実感を子どもに！

大人が子どもに対し「話をき

平成20年度人権標語優秀作品

手をつなぎ 輪と和でつくろう 人権社会 小野格彦さん

んと聴く」「同じ目線で考える」といった姿勢を示すことで、子どもは親に愛され、大人に見守られている実感をもちます。親の愛や周囲の大人の見守りを感じている子どもは気持ち安定し、さまざまな悩みや問題に立ち向かうことができるようになります。

悩みを無理に聞き出さない！

思春期の子どもに「悩みがあるなら話さない」と言っても、自我に目覚め、親離れを始めた子どもが、そう簡単に打ち明けるはずもありません。無理に聞き出そうとせず、自分の思春期を思い起こしてみよう。「今思えば笑っちゃうけど」という親の体験談は、悩める子どもに道しるべになるでしょう。

大人が正しいとは限らない！

子どものために考えてしたこと

しかし、必ずしもそうとは限りません。子どもが一人でできることを先回りしてやる(転ばぬ先の杖をすけすぎる過保護)、子どものすることに一々口を出す(過干渉)などは、思春期の子どもに芽生えた自立心や自尊心を摘み取ることになりかねません。じつと見守ることとは過保護や過干渉よりもずっと難しいことですが、自分で考えて行動し、達成感を味わったり、失敗から学ぶチャンスを子どもから奪わないよう、過ぎた手出しをひかえることも大切ですね。

道理を説くのもほどほどに！

人が行うべき正しい道を子どもに教えるのは、大人の大切な役割の一つです。しかし、道理を説かれた子どもは、反論する余地がないだけに、追いつめられて逃げ場を失ったような気持ちに陥りがちです。子どもに道理を説くときは、わが身のありようが問われます。「ときには道をはずすことがあっても軌道修正は必ずできる」というス

タンスこそが、子どもの目線に立つために、大人に求められているものではないでしょうか。

わが子も近所の子も！

「自分の子だけよければ…」というのは、子をもつ親の一部の方にありがちな「自己中心主義」と言えます。その延長線には「自分の子は自分で守る」「他人にとやかく言われたくない」といった心理が生じます。ひいては他の親も自分と同じ考えだと思い、近所の子ばかりか親類の子にさえ関心をもてない自分に気づくこともあります。でも、子どもは、親だけではなく地域や学校など多くの人との関わりの中で育っていくものです。非行に足を踏み入れようとするわが子が、周囲の大人によって救い上げられることもないわけではありませぬ。わが子だけでなく、他人の子にも優しい気持ちで接していきたいものです。それが「大人力」の一つだと言えます。(来月号「ほうっておかない！」に続きます)